

異文化適応の心理学についての調査研究(その2)*
—中国人留学生を対象に—
Study on intercultural adaptation of foreign students in Japan (2)

李艶

猪田早規**

Li Yan

Inoda Sachi

キーワード: 対人関係 (Interpersonal relationship)
異文化適応 (Intercultural adaptation)
在日留学生 (Foreign students in Japan)

要 旨

本研究は質的調査研究手法を使い、中国人留学生を対象に異文化適応についての心理を究明することを目的とした。

質的調査方法として、自由記述法と半構造化面接、予め質問を用意しておくが、被面接者の状況や回答に応じて、質問の表現、順序、内容を変化させてインタビュー法を使った。得られた質的調査データについて、テキストマイニング分析を行い、新しい角度から留学生の異文化適応の心理が見えてくるようになった。本調査研究の結果から、以下のことが明らかになった。留学生の日本に留学することは、興味があつて自ら留学する意思があつた。異国での生活はハードだが、「慣れ」に努力するのが重要だと認識された。留学生の適応について、障害生じるのが食習慣・食生活に多い見られた。異文化適応するには対人関係のスキルが有利だ。困難に遭遇するときポジティブ感情で対応する。異国のことを知ることは異文化適応の早道だ。

本研究の調査から、留学生の異文化適応に関する心理が明らかになったことで、留学生の受け入れと指導に参考になる。

本論文は心理学研究分野での研究倫理を遵守し、完成したものであることを表明する。

* 異文化適応の心理学についての調査研究(その1)の続き

** 聖泉大学の卒業生

問題

1983年に、文科省が21世紀への留学生政策に関する提言の中で、いわゆる「留学生受け入れ10万人計画」を策定して以来、日本に渡来する外国人留学生の人数は急激に増加している。1983年当初には10,428人に過ぎなかった外国人留学生が1990年には41,347人に増え、2008年時点では123,829人に膨らんでおり、その中でも中国人留学生が全体の58.8%と留学生全体の半数以上を占めている(日本学生支援機構, 2018)。また2008年7月には、文部科学省は2020年を目途に「留学生30万人計画」と大幅な受け入れ方針を表明している(文部科学省HP, 2008)。

留学生が増加する一方で、留学先での問題の発生が懸念される。2019年6月、東京福祉大学で、学部研究生ら海外からの留学生1600人超が所在不明になっていたとした調査結果が文部科学省から公表されたが、この問題の問題点として、文科省と出入国在留管理局は「留学生の不適切な受け入れや不十分な管理体制が大量の所在不明者を発生させた」としている。2016年度以降、それまで数十人規模だった同研究生を一気に1000~2000人以上に増やしたものの、入学選考で求められる日本語能力レベルを大幅に下回る研究生が多数在籍していたという。

先行研究において、日本にいる留学生は、日常生活における悩みや困難として、日本語の困難、勉強面の困難、経済の困難の大きいことが報告されている(岡・深田, 1994)。それ故、在日留学生の心身の健康に関する研究が注目されるようになった。

松原・石隈(1993)は、外国人留学生からの相談内容について、言語の問題、経済の問題、生活の問題、健康の問題、修学の問題、人間関係の問題、文化の問題の順で多かったことを述べている。さらに加納・村田(1994)は、中国人留学生が「日本人との人間関係」「日本人の考え方・価値観」領域に慣れるまで最も時間を必要とすると報告した。

横田(1991)は、大学内で留学生と日本人学生が親密な関係形成を阻む要因として、留学生からは「言葉の壁」「日本的習慣」「対人関係形成の違い」が挙げられ、日本人からは「暗黙のルールが通用しないことへの不安」「無関心」などが挙げられた。

在日留学生の健康と困難の問題が注目される中、対人関係上の問題として、いくつかの研究が行われている。対人関係上の困難として行動上の困難や問題点が挙げられた(田中・藤原, 1992)。また、社会的困難度が高く、葛藤経験として多く挙げられたものは

自己主張であった(加賀美, 2003)。さらに、対人関係の困難に関する原因認知では、スキルの不足が原因であり、対人関係にとってスキル(日本語能力)の重要性が確認された。

また、特に、在日中国人留学生のストレスについて、英語を母語にする留学生との比較をした「研究では、中国語群は英語圏より精神健康度が悪い傾向にあり、「経済的困難」や「日本社会への適応」の面でストレスを感じていることが分かった(Ozeki, Knowles, Ushijima, & Asada, 2006)。

以上のことから、在日留学生には、言葉、経済、対人関係などさまざまな領域で困難な問題を抱えていることが明らかになった。その中でも、留学生の困難な問題として対人関係面の問題が多く取り上げられていることがわかる。このことから、在日留学生には、人間関係の問題が困難として強く認識されていることが明らかである。それ故、対人関係によるストレスは極めて大きいと考えられる。

渡邊, 今野(2011)は、異文化適応には様々な定義があり、研究者間で異なっていると述べている。たとえば、周(1995)は異文化適応を「個人と他の文化圏、社会あるいは国家の人たちとの間に調和のとれた満足すべき関係が保たれている状態」と考えた。山岸(1995)は、「異文化環境下で仕事や勉学の目標を達成し、文化的・言語的背景の異なる人々との好ましい関係を持ち、個人にとって意味のある生活が可能になること」と述べている。田中(2000)は、異文化適応を「心身が健康で、社会的にも良好な状態で課題達成を遂げており、異文化特性に基づく困難を乗り越えて異文化理解を果たしていること」と論じている。

以上に挙げた3つの異文化適応の定義は、適応を調和のとれた好ましい状態として捉えており、異文化適応は静謐なものであることを述べている。

これに対して、高井(1989)は、異文化適応を「ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程である」としている。高井(1989)によれば、個人が環境の変化のどの側面にどの程度達成できるか、また、どのような経過をたどって達成できるかが問題とされ、異文化適応を心理的な「過程」として捉えた。さらに、江渕(1991)は、異文化に適応していくことは、自他調整の過程であると定義し、「(異文化の適応とは)自己との内面的環境との闘いであり、自己挑戦、自己変革の過程」と述べている。

Trompenaars and Charles (1997) は、異文化適応の際に生じる問題を①人間関係、②時間に対する態度、③環境に対する態度の3つに分類している。

- ① 人間関係においては、さらにそれぞれの文化によって5つの相反する価値観(普遍的：個別主義、個人主義：共同体主義、感情中立主義：感情表出主義、関与特定の：関与拡散的、達成型地位：属性型地位)が存在する。
- ② 時間に対する態度とは、時間に対する価値観の違いから生まれるものである。
- ③ 環境に対する態度とは、環境に影響を与えるものへの考え方の違いから生まれるものである。

以上の異文化適応に関する先行研究を総括して、**本研究では**、異文化適応とは「個人が自身の生まれ育った社会環境から離れ、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程にて、文化的・言語的背景の異なる人々との好ましい関係を持ち、個人にとって意味のある生活が可能になること」、と定義することとする。

人は、自分が生まれ育った文化以外の文化に接触した場合には、言葉の障害も加わり、新しい文化の中でうまくやっていくことは容易ではなく、心理的に混乱した状況に陥ることが多い。これがカルチャーショック(culture shock)と呼ばれるものである。

カルチャーショックとは、オバーク(Oberg, K., 1960)によって紹介された概念とされている。カルチャーショックについてのさまざまな定義を検討した星野(1980)は、「文化ショックは一般には、個人が自身の文化が持っている生活様式・行動規範・人間観・価値観とは多かれ少なかれ異なる文化に接触した時の、当初の感情的衝撃・認知的不一致として把握されることが多いが、決してそれだけにとどまらず、それに伴う心身症状や、累世的に起こる潜在的・慢性的パニック状態である」と定義している。また、サイコセラピスト(心理治療家)の近藤(1981)は、カルチャーショックを「異文化との接触において生ずる心理的反応の状態」と表現し、その反応の仕方は個人によって異なり、「軽度の当惑感病的な症状からパニック感や精神的障害など、かなり強度の症状を生じさせるものまでいろいろある」こと、「瞬間的なショック現象で終わるよりも、一定の時間にわたって生ずる現象である」ということを述べている。すなわち、カルチャーショックは、異文化との接触において生じる、個人によって異なる、さまざまな心理的反応の状態やそれに伴う身体的症状と言えらる。

留学生の日本語能力について述べる。

学部留学生に必要な日本語能力とは何かについて、日本留学試験の「日本語シラバス」 「測定対象能力」の記述によると、この試験は日本での留学生活を送る上で、日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか、また、自国での初等・中等教育修了までに習得した知識を前提としながら、日本の大学での学習・研究活動を行うための日本語能力があるかどうかを測定する言語テストであり、かつ、標準テストである。」と述べられている。つまり、日本語によるコミュニケーション能力、および日本の大学での学習・研究活動を行うためのスキルという二つの部分に分けられていると考えられる。

また、堀井(2006)は日本の大学での勉学に対応できる日本語力とは、「日本語による講義を聞き取り理解する力、大量のテキストや資料、参考文献などの読解力、レポート・論文や発表のための情報収集力、レポート・論文を書く力、発表をする力、学内でコミュニケーションをとり人間関係を作る会話力などである」としている。また、以上の能力は、知識や形式的なスキルだけでは得られない、総合的に「学び」につながる力であると捉えている。さらに、大学に入学してから、大学の講義や文献の理解力、レポート作成に求められる聴解力、読解力、文章表現力は大学入学後にすぐに必要とされ、それらはその後続く専門ゼミでの発表、卒論作成のための文章・口頭表現力の基礎能力となるとしている。さらに、以上で述べた学習・研究活動を通して訓練・蓄積された論理的・分析的思考力および表現力は今後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動に必要な日本語力へとつながっていくとも考えている。

研究の目的

以上述べた先行研究にて、在日留学生には、言葉、経済、対人関係などさまざまな領域で困難な問題を抱えていることが明らかになり、その中でも留学生の困難な問題として対人関係面の問題が多く取り上げられていることが分かった。在日留学生には、人間関係の問題が困難として強く認識されていることが明らかであり、それ故、対人関係によるストレスは極めて大きいと考えられるだろう。

ここで特記すべきことについて、先行研究にて度々言われている在日留学生の出身地域である。田中・藤原(1992)の指摘によると、研究対象の出身地域が違うと、得られる結果が大きく異なるという。

筆者は、異文化適応を検討する場合は、研究対象の出身国の限定が必要であると考え、これは、留学生の適応研究を行う場合、一つの国の留学生に限定した研究の方が、

文化的要因をコントロールすることが出来るからとされている。

在日中国人留学生は、日本に来ている留学生の中でも、半数以上を占めているが、中国人留学生だけを対象とした研究はあまり多くない。さらに、中国からの留学生は今後も増加する傾向にある。このことから、中国人留学生の日本での適応に関する研究は有意義なものであると考える。

また、上記で述べた通り、先行研究にて留学生の異文化適応にとって対人関係が重要な役割を果たすことが示唆されているが、その対人関係を円滑に回すために、必要なものとは何だろうか、と考えたときに、必須と言えるものは日本語能力であると考えられる。日本という異文化の中で、日本人と対人関係を築くには、日本語を話せないと難しいと考えられるからだ。対人関係が留学生の異文化適応に対して重要な役割を果たすことで、日本語能力、留学生が日本という異文化に適応するために重要な役割を果たすと言える。

本研究では、質的調査研究手法を使い、在日中国人留学生の異文化適応に関連する要因について検討する。具体的に、半構造化面接法で留学生の日本人学生との関わりを明らかにし、またそのかかわりが留学生の日本語能力に影響を及ぼす関連性についても探ることを目的とした。

方法

調査協力者

インタビュー法の調査協力者は、同じく日本の私立大学に在籍している中国人留学生46名である。なお、インタビュー調査の調査協力者は、研究1の質問紙調査の協力者とは別の中国人留学生である。

調査協力者は在日一年以上の中国人留学生である。

調査場所は私立大学、県内の国際交流会館等である。

質的調査方法

自由記述法と半構造化面接法

自由記述法

自由記述のメリットは、多肢選択式のものとは違い、思ってもみない回答が得られる

半構造化面接

半構造化面接は予め質問を用意しておくが、被面接者の状況や回答に応じて、質問の表現、順序、内容を変化させる面接法である。つまり、面接中にさらに質問を加えられ、また質問の順序を変えることができ、さらに周囲の他者からのクライアントに関する情報を参考することができるメリットがある。

本研究では、以下の設問を前もって用意した。

- 1) なぜ日本を選んで留学したのですか？
- 2) 異国での生活全般はどうですか？
- 3) 一番慣れないことは何ですか？なぜですか。
- 4) 日本人との交流に一番難しいと思うことは何ですか？なぜですか
- 5) 異文化適応で困難なことに遭遇されたとき、どのように対処しましたか？
- 6) よりよい異文化交流ができるようにご提案を聞かせください。

実施手続き

質問紙調査に協力していただくにあたり、本調査の目的、内容、倫理とプライバシーの保護、質問紙の回答方法について説明時間を設けて教示した。

結果

半構造化面接の結果

設問項目ごとに、テキストマイニングツールの方法を使用し、分析を行った。その結果を以下に図にして表した。

高い単語の図示であるワードクラウドは【図 2,5,8,11,14,17】、

感情の傾向を表したポジネガは【図 3,6,9,12,15,18】、

高い単語の出現を表した2次元マップは【図,7,10,13,16,19】の3種類であり、各項目別に表した。

ワードクラウドは、スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示されていた。単語の色は品詞の種類で異なっており、それぞれ(青色が) **名詞**、(赤色が) **動詞**、(緑色が) **形容詞**、(灰色が) **感動詞**を表していた。(注：白黒印刷がされたため、品詞の種類のみ表している)

ポジネガは、文章に含まれるポジティブな感情の文とネガティブな感情の文の存在比を示していた。

2次元マップは、文章中での出現傾向が似た単語ほど近く、似ていない単語ほど遠く配置されていた。距離が近い単語はグループにまとめ、色分けされていた。

① 「日本に留学した理由について」

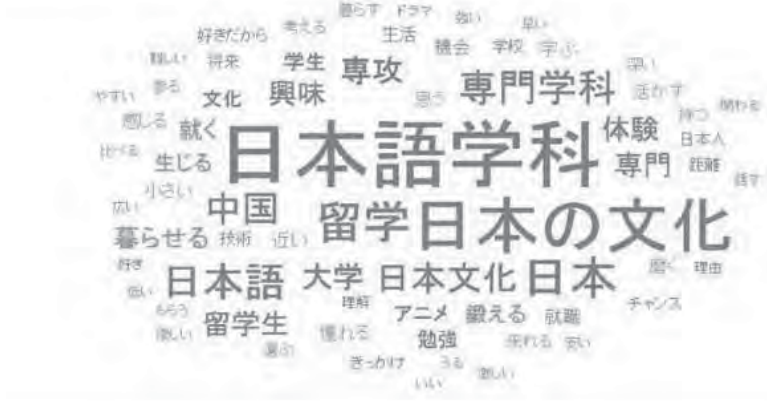


図2：高い単語の図示

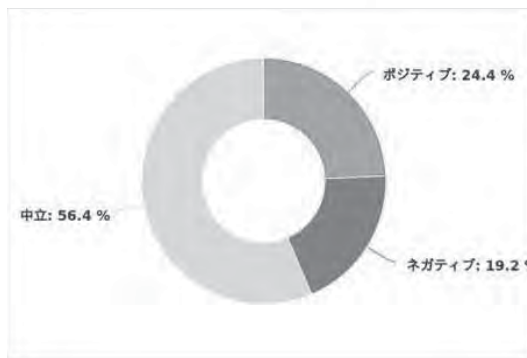


図3：感情の傾向

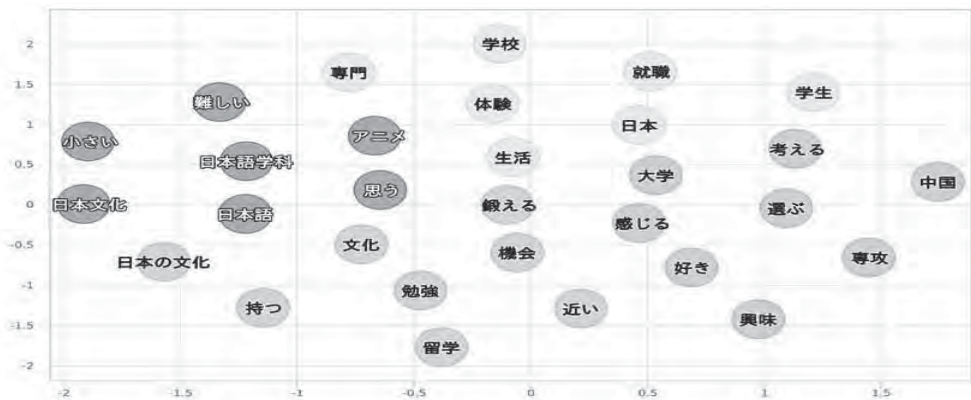


図4：高い単語の出現の2次元マップ

② 「異国での生活全般について」

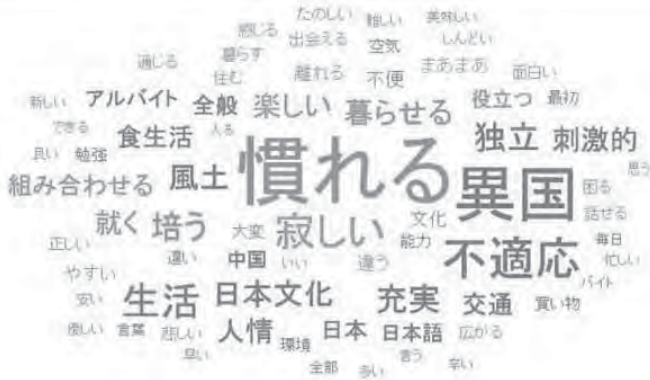


図5：高い単語の図示

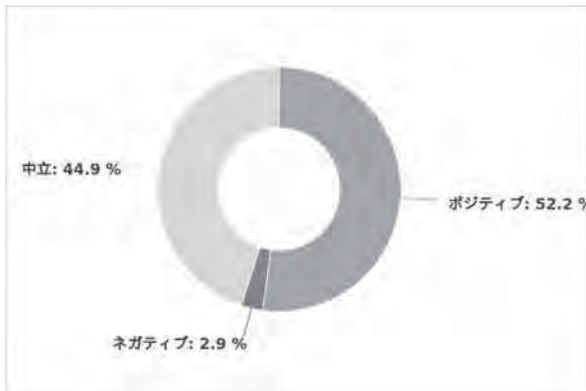


図6：感情の傾向



図7：高い単語の出現の2次元マップ

③ 「日本に来て慣れないことについて」

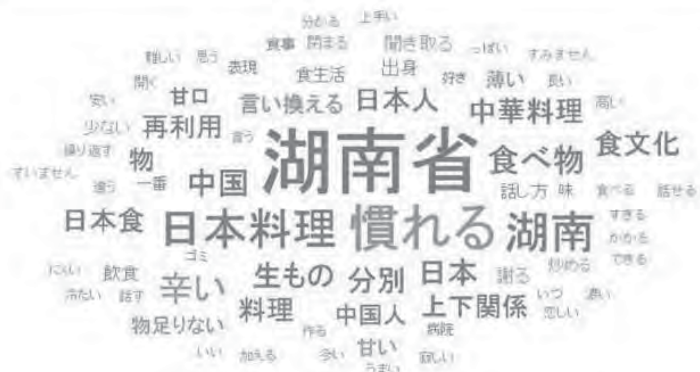


図8：高い単語の図示

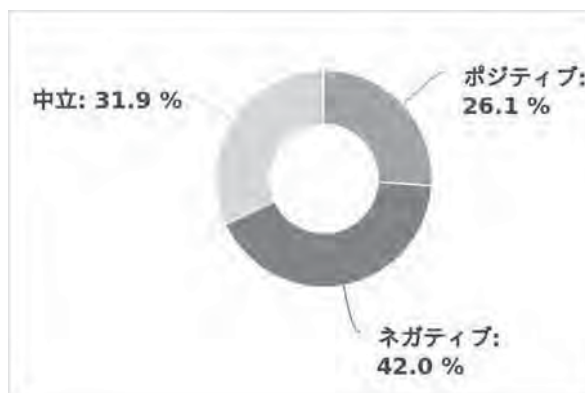


図9：高い感情の傾向

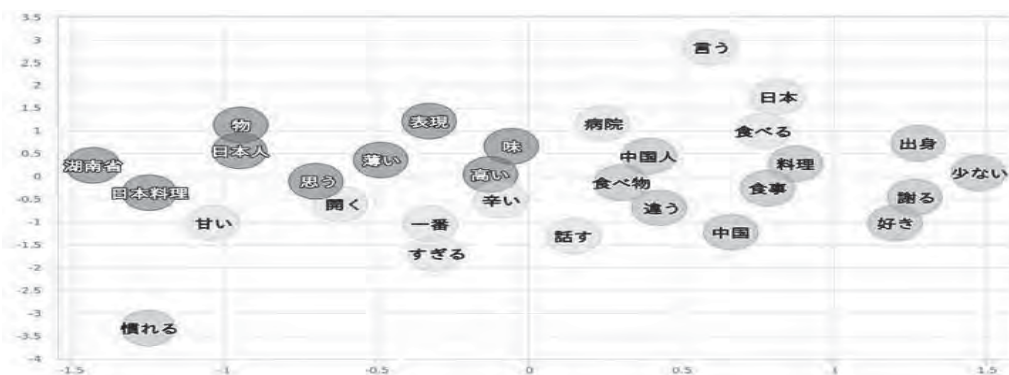


図10：高い単語の出現の2次元マップ

④ 「日本人と交流する上で一番難しいことについて」

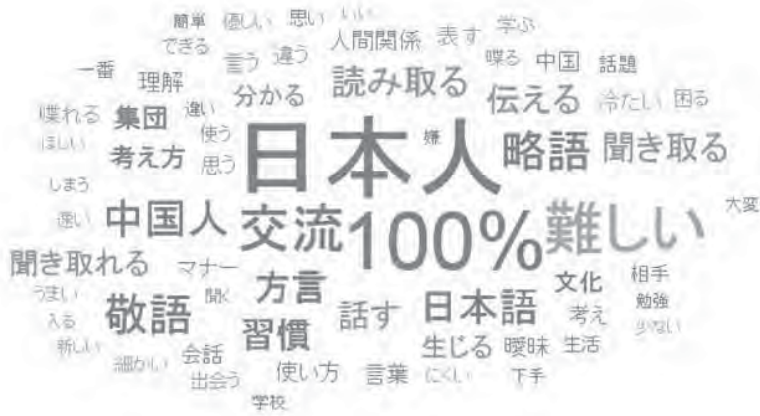


図11：高い単語の図示

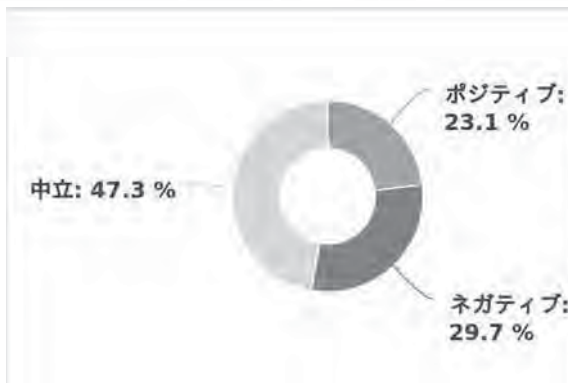


図12：感情の傾向

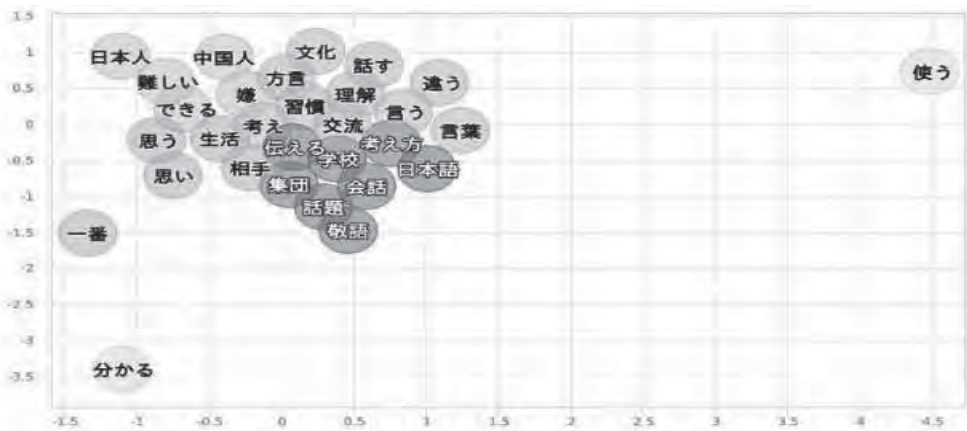


図13：高い単語の出現の2次元マップ

⑤ 「異文化に適応できない状況に遭遇した時、どうするか・どうしたかについて」

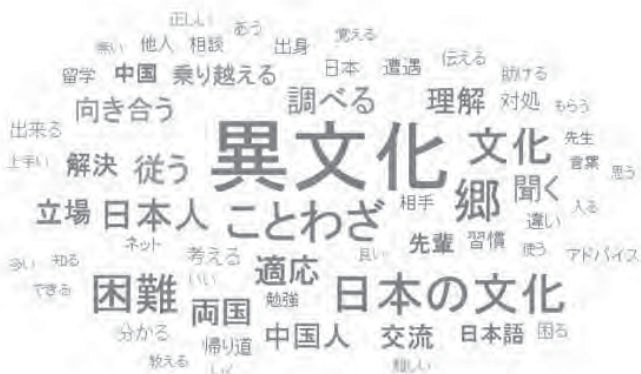


図 14: 高い単語の図示



図 15: 感情の傾向

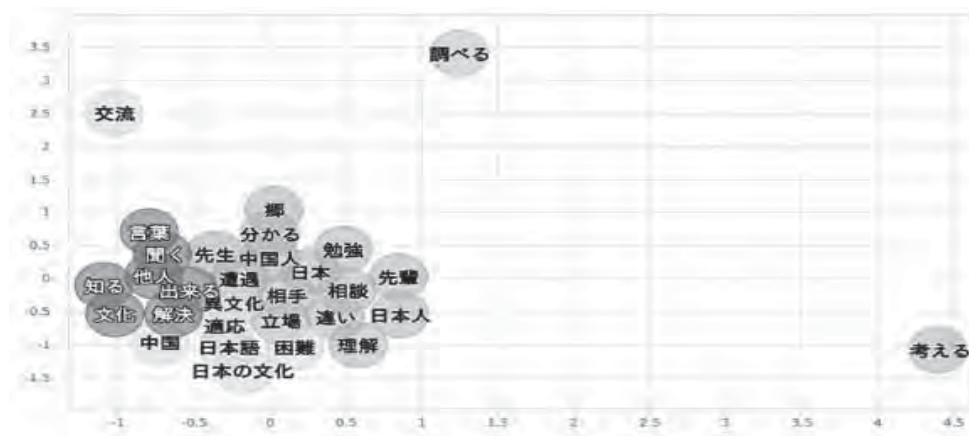


図 16: 高い単語の出現の2次元マップ

⑥ 「異文化適応の提言について」

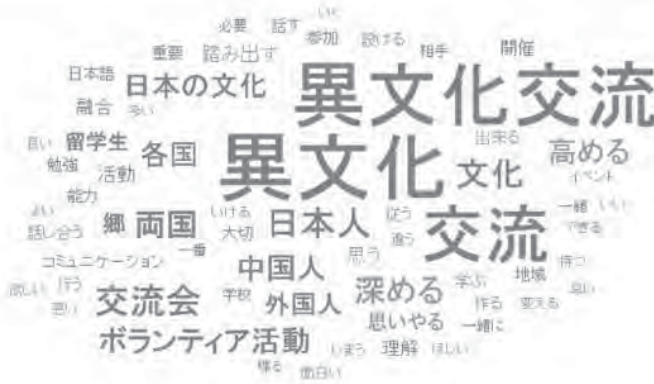


図 17 : 高い単語の図示

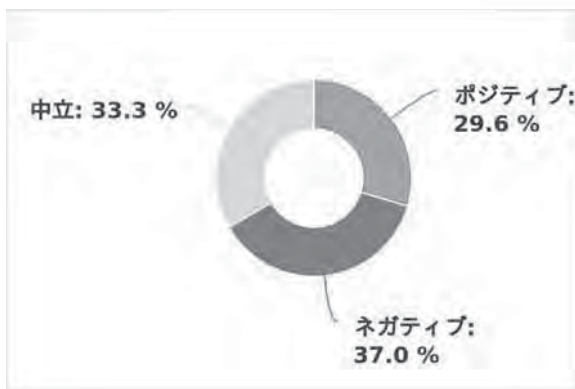


図 18 : 感情の傾向

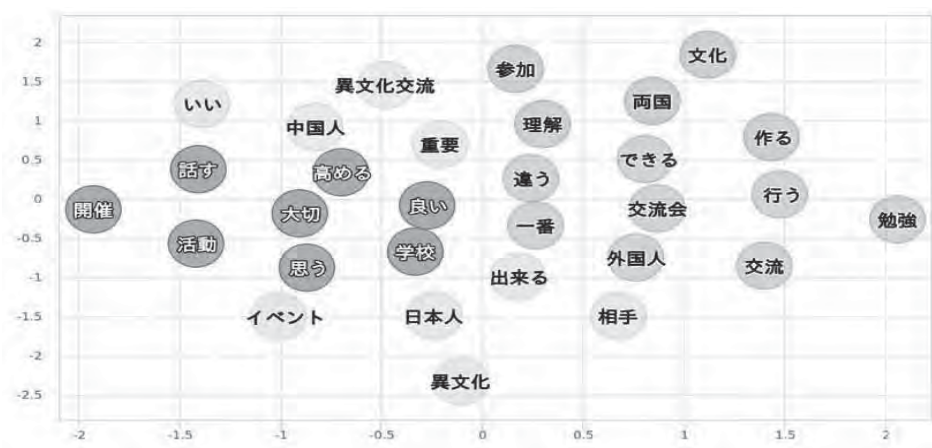


図 19 : 高い単語の出現の 2次元マップ

問1の結果から、留学生が日本へ留学してきた理由として最も多い事柄は、「日本語学科であったから」であった。他にも、似たような理由として、「専門学科」「専攻」があった。次いで、「日本の文化」「日本語」「興味」などが、出現頻度が高いとされた。また、図2の感情の傾向から、日本にやってきた理由に対して、ポジティブな感情、ネガティブな感情を持っている留学生が同等数いることが分かった。

問2で最も出現した単語は「慣れる」であった。次いで「異国」「不適応」が目立つ結果となった。他にも、「寂しい」「楽しい」といった真逆と言える感情や、「刺激的」「充実」などという言葉が多く出ていた。感情の傾向としては、ポジティブな感情が52.2%と、ネガティブな感情より圧倒的に多く見られた。

問3で最も出現した単語は、「湖南省」であった。次いで、「慣れる」「日本料理」「食べ物」「日本食」「食文化」「中華料理」など、食事関連の言葉が多く出ていたと分かった。感情の傾向は、ネガティブが42.0%、ポジティブが26.1%と、ネガティブな感情が2倍ほど多いことが分かった。図9を見ると、「日本料理」と同程度の出現傾向として「味」「薄い」「日本料理」や、「甘い」「辛い」など、食事に関して多くの不満が出ていることが分かった。

問4で多く出現した単語として、「略語」「敬語」「習慣」「聞き取る」「読み取る」などが挙げられた。他にも「日本語」「方言」など、会話に関する単語の出現が多く見られた。感情の傾向としては、ネガティブがポジティブを9%ほど上回る結果となった。図12のマップを見ても、言語の面に多くの関心が向けられていることが分かった。

問4で多く出現した単語は、「異文化」「日本の文化」「ことわざ」「郷」「理解」「調べる」「聞く」などが挙げられた。他にも、「考える」や「向き合う」など、行動的な単語が多く見られた。感情の傾向は、ポジティブが34.2%と、高い数値となっていた。

問6で多く出現した単語は、「異文化交流」「日本の文化」「両国」「交流会」など、交流といった単語が目立つこととなった。感情の傾向としては、ポジティブが29.6%、ネガティブが37.0%と、ネガティブな感情が強い傾向にあると分かった。

考察

問1は、日本にきた理由として、最も多かったのが日本語学科に通っているからということであった。日本語の専門学科に通って日本語の勉強をしている、という意見が、留

学生の言葉をまとめながら多く見られた。他にも、日本に留学すればもっと日本語が上達すると思った、という意見や日本のアニメが好きで、本物の日本の社会を見たいと思った、という意見が多く見られた。様々な意見があったが、留学生達が日本留学する理由として、日本の様々な文化に興味を持って、母国で日本語の専門学科に通っているというのは明らかである。

問2は、異国での生活全般はどうか、という問いである。結果として出てきた3つの図を見ると、これもまた様々な意見があるが、「慣れた」という意見がとても多い。先行研究によると、外国人留学生からの相談内容として、生活の問題(松原・石隈, 1993)が多く、現実生活に関する問題、環境の違いに関する問題(姚・松原, 1990)をストレス因子として上げているが、現状では不適応な場面もあるが、生活全般は良好であると言えるのではないだろうか。

問3は、日本に来て慣れない事、といった問いである。こちらは、図8を見れば分かるのだが、ネガティブな感情傾向が強めに出ている。出現数の多い単語を見てみると、飲食関係の単語が多く出ているのが分かる。今回インタビューに協力して頂いた中国人留学生の多くが、出身が湖南省であった。図7で湖南省という単語が大きく出ているのは、その影響であると考えられる。中華料理は総じて辛めのものが多いが、曰く、湖南省の出身の人は特に辛い物を好む傾向にあるとのことで、日本の薄味・甘めの食文化とは根本的に合わず、それが日本に来て慣れない事、総じて食文化に対する不適応が表れてしまっていると考えられる。また、食文化の他にも、日本人の話し方や習慣に慣れない、といった意見も少数だがあった。日本人の口癖のようにになっている「すみません」などの謝罪が慣れないのだという。先行研究より、中国人留学生が「日本人との人間関係」「日本人の考え方・価値観」領域に慣れるまで最も時間を必要とすると報告されているが、これは先行データと一致していると考えられる。

問4は日本人と交流する上で一番難しいこと、といったものである。図10を見ると、主に日本人とコミュニケーションをとること、と言えるだろう。特に、日本語で会話をすることが困難、と訴える留学生が多かった。日本語には方言や略語など、独特の言い回しがあるので、日本語を勉強中の留学生には難しい面もあると思われる。先行研究によると、対人関係の困難に関する原因認知では、スキルの不足が原因であり、対人関係にとってスキルの重要性が確認されたと説明している(田中, 1995, 2003)。日本で日本人と関

係を築くにあたって、会話ができる程度の日本語のスキルは必要不可欠とも言える。これは、今回のインタビューの結果から分かる通り、先行研究と一致する部分であると考えられる。

問5は、異文化に適応できない状況に遭遇した時の行動についての問いである。結果の図表から多く見られるのは、中国人留学生の日本という異文化に適応するための前向きな行動や感情である。前向き、と言う理由は、図14からも読み取れる通り、中国人留学生が異文化に適応できない状況に遭遇した時に取る行動等に付随する感情が、非常にポジティブな傾向にあったからである。日本という異文化の中に身を置いている以上、適応しようと行動を起こすしかない、といった点も考えられるが、それでも「乗り越えるために異文化に向き合う」といったことや、「理解するために調べる、身近な留学生の先輩、同輩、または日本人の友人に聞く」といった意見もあった。また、「郷に入っては郷に従え」ということわざを実践している」といった意見も多く見られた。多くは、日本や日本人の立場を考え、理解して受け入れるといった姿勢で、異文化に適応しようとしている。中国人留学生が異文化に適応できない状況に陥っても、自ら問題提起して、行動を起こせることが結果から考察できる。

問6は、異文化適応を深めるためにはどうしたらいいか、という問いである。結果から、特に「異文化交流をする」「中国と日本、お互いの異文化を知るための交流会やイベントを開催する」といった意見が多く見られる。また、結果には反映されていないが、今回協力していただいた多くの留学生が、実際に何らかの異文化交流会に参加しているのだと、インタビューから明らかになった。

留学生が、交流会等で日本人と交流し、話すことが大切であると考えているのは、図19を見れば考えられることである。文化を理解することで、適応が深まると考えられる。そして、その交流を深めるために、日本語能力を高めることが大切であると考えられる。横田(1991)は、大学内で留学生と日本人学生が親密な関係形成を阻む要因として、留学生からは「言葉の壁」「日本的習慣」「対人関係形成の違い」が挙げられ、日本人からは「暗黙のルールが通用しない事への不安」「無関心」などが挙げられるとしている。異文化を深めるためには、お互いの文化の違いや言語の違いなどを乗り越えて、文化を理解するために言葉を交わし合い、親密な関係を作ることが、大事なのではないかと考える。そして、お互いの文化を理解することと、一個人として、【相手】と【自分】の事を、言

葉を交わし、知っていくことが、親密な関係を築くための第一歩となるのでは、と思う。

文献

- Black, J. S. and Mendenhall, M. (1990) "Cross-cultural training effectiveness: A review and theoretical Framework for future research", *Academy of Management Review*, Vol.15, No.1 pp.113-136
- 江淵一公 (1991) 在日留学生と異文化間教育 異文化間教育 5号, P. 4-20 .
- 本多尚子 (2017) 日本人学生と留学生との間の異文化交流: 異文化コミュニケーション授業を対象とした歴ストマイニング分析
日本英語英文学= Studies in English linguistics and ..., 2017 - jaell.org
- 堀 洋道 (2011) 『心理測定尺度集V』 サイエンス社 P.185
- 星野命 (1980) 『概説カルチャーショック』 現代のエスプリ, 1980
- 加賀美 (2003) 多文化社会における教師と外国人学生の葛藤事例の内容分析
-コミュニティ心理学的援助へ向けて- コミュニティ心理学研究,
2003 7 卷 1 号 P.1-14.
- 加納満, 村田邦子 (1994) 長岡技術科学大学留学生の日本語能力および学習実態に関する調査: 教官に対する調査結果の集計報告その1
長岡技術科学大学言語・人文科学論集, 1994
- 近藤裕 (1981) 『カルチュア・ショックの心理』 創元社
- 李艶・山本理沙 (2020) 在日外国人労働者のお異文化適応についての研究 その1
聖泉論叢 No28 P.1-18.
- 李艶・山本理沙 (2020) 在日外国人労働者のお異文化適応についての研究 その2
聖泉論叢 No28 P.19-40.
- 中川 かず子 (2012) 日本人学生と留学生の異文化交流 -異文化接触、協動的活動を通じた大学教育への適応と意識変容- ウェブマガジン「留学交流」 Vol.13
- 中川かず子, 神谷順子 (2000) 大学生の教育・生活に関する態度と価値観、並びに大学教育に対する適応 北海学園大学学園論集 第106号
- 小川都 (2011) 大学学部における留学生の日本語コミュニケーション能力および学習スキルの実態に関する研究- 共分散構造分析を通して -

専修大学外国語教育論集, 2011

鈴木一代 (1997) 『異文化遭遇の心理学 ―文化・社会の中の人間―』 ブレーン出版

清水祐士 (2016) フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究
実践における利用方法の提案

メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, P.59-73.

高井次郎(1989) 在日外国人留学生の適応研究の総括

名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科篇 1989 Vol 36, P.139-47.

Trompenaars, F. and Charles H.T. (1997). Riding the Waves of Culture Shock, Nicholas
Brealey Publishing

(須貝栄訳『異文化の波：グローバル社会・多様性の理解』白桃書房, 2001年)

田中共子 (1998) 在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究
の視点から The Annual Report of Educational Psychology in Japan 1998,
Vol.37, P.143-152.

田中共子・藤原武弘 (1992) 在日留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進する
ための日本のソーシャル・スキルの検討
社会心理学研究 1992年7巻2号 P.92-101.

松原達哉・石隈利紀 1993 外国人留学生相談の実態(資料)
カウンセリング研究, 1993

岡益巳, 深田博己 (1994) 中国人留学生と就学生の意識
岡山大学経済学会雑誌 26(1), 1994-06 P.1-28.

渡邊勉, 今野裕之 (2011) 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望
目白大学 心理学研究 No7 2011 P.95-11.

柳佳慶, 松田英子 (2011) 在日中国人留学生のストレスと異文化適応に関する研究 ―
文化受容態度と自己効力感からの分析― : 情報と社会, 2011 P.151-160.

ユーザーローカル テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>)

横田雅弘 (1991) 自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係
一橋論叢, 1991